

私を見て . . .

璃玖

「俺、好きな子いるんだ」

「え？」

いつもの学校の帰り道、
友達の優美とわかれて2人で帰っている時、隣にいる浩介が告白してきた。

いきなりそんなこと言うから吃驚した。

「誰だか、分かる・・・？」

あんまりにもじっと、

私の方を見て言うものだから、

私は迂闊にも

『期待』

をしてしまった。

そんなことあるわけないのに・・・

「分かんない・・・誰？」

ドキドキしながら聞く私。

違う子の、よく知ってる子の名前を言われるのに・・・

「・・・優美、なんだ——」

「っ・・・」

照れながら言う彼。

いつもなら照れた顔もかっこいいと思うけど、

今の私にはその照れた顔が残酷だった。

「・・・吃驚させちまった、よな？」

「・・・うん」

「だよなー、つかお前に言うだけでもすっげー緊張したー！」

言い終わってホッとしたんだろう。

さっきの緊張した空気が彼のひと言で一気にやわらかくなった。

「・・・なんで、私に言ったの？」

「ん？」

「仲いいから？」

「んーそれもあるけど・・・」

「？」

「なんか、お前には知っといってもらいたかったんだ、協力してくれよな」

そんな私の大好きな笑顔で言われたら、協力するしかないじゃん。

「・・・いいよ、協力してあげる」

「マジ！！」

「うん」

「ありがとう！」

ものすごく笑顔の彼。

その笑顔が見れるなら私は・・・

目覚ましの音で目が覚めた私の気分は最悪だった。

「・・・学校行きたくないよ」

全然動く気になれない私を怒鳴る声の下から聞こえた。

「美香！！早く起きないと遅刻するわよ！！」

「・・・ハア」

「美香！！」

「もう起きるてば！」

動かない体を無理矢理動かして学校に行く準備をする。

準備をし終わってご飯を食べに行くとお母さんが忘れてたと言うように私に話しかけてきた。

「そーいえば浩君が迎えに来てるわよ、珍しいわねー」

「・・・え、誰が？」

「だから浩君、こーうーすーけーくーん」

「何でもっと早く言ってくれないの！」

「だって中々起きて来ないし、って美香！？ ご飯は！」

「いらない！ 行ってきます！」

ご飯を食べずに出ていく私を止めようとするがそんな暇あるわけがない。

急いで玄関を出ると後ろ姿の浩介がいた。

「・・・お、おはよう」

「おはよー、バタバタしてたなー」

「だ、だって急に浩介がいるって聞いたから・・・」

「もっとゆっくりしててもよかったのに」

浩介がいるって聞いたのにゆっくりできるわけないじゃん・・・。

でもそんなこと浩介に言えるわけもなく無難なことを聞く。

「てか何でウチの前にいるの？」

「ん？ 一緒に行こうかなって思って」

「えー？ どうせ優美の事でしょ」

言ってから後悔した。

「なんだバレたか」

心臓がズキとした。

でも顔にだしたりしたら、浩介が変に思うからテンション高くしなきゃいけない。

「・・・そりゃーバレるよ！ 顔ニヤニヤしてたもん」

私の言葉を聞いて、手で顔を隠しながら叫びだした。

「え！ うそっー！！ オレ、ニヤけてる！？」

「うん、もー誰が見ても分かるくらいには」

「ぎゃーどうしょ！ これじゃ学校行けねー」

「アハハ、ウソだよ！ うーそー！」

「なっ、てめー」

顔を真っ赤にしながら私の頭をぐしゃぐしゃにしだす。

「きゃーやめてー」

「お仕置きだー」

「きゃーごめんって！」

「もっとちゃんと謝れー」

「ごめんなさい！ すみません！！ 申し訳ございません！！！」

「・・・仕方ない、このくらいで勘弁してやろう」

そう言って浩介の手が私のぐちゃぐちゃになった髪の毛から離れていく。本当はもう少し触ってもらいたかった。

「あーせっかく整えてきたのに」

髪の毛を整えながら言うとオレのせいじゃないと言う事を言われた。

「自業自得だ」

「う～」

浩介を見るとじゃれ合いの終わりぐらいから遠くの方を見ている。

なんだろうと思っていると、ピンっとあることが思い当たった。

———優美が来るの待ってるんだ・・・